



## 歴史叙述の物語性と倫理

樋口, 大祐

---

**(Citation)**

倫理創成講座ニュースレター, 1:17-19

**(Issue Date)**

2003-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001703>





## 歴史叙述の物語性と倫理

樋口大祐(国文学)－「マイノリティ文化論」担当

筆者が担当する『マイノリティ文化論』という言葉には、ある国家・社会における少数派（民族的

または性的等等の)に固有の文化に関する実体的研究、というイメージがありますが、ここで考えている事柄はそれとは少し異なります。筆者の考えでは、マイノリティとは決して実体的なものではなく、ある社会においてさまざまな要因により、構造的に従属的立場に置かれている人々を指す、優れて関係論的な概念です(多くの場合、そのような構造が再生産され、固定化される傾向があるとしても)。従ってここでは、ある特定のマイノリティ・グループの文化についての研究ではなく、マジョリティ/マイノリティという二元的構造を生み出すメカニズムそのものを考察し、それを解体するための方策を考えることを重視したいと思います。当面、上記のメカニズムの一形態である、歴史叙述という言説ジャンルに焦点をあてて、考えていくつもりです。

筆者は日本語で書かれた歴史叙述における表象効果、及びその享受形態の分析を研究テーマの一つにしています。歴史叙述のうち優れたものの多くは、その作者が自身の生きている時代の危機(意味の拡散状況)を自覚し、その時代(彼らにとっては現代)の状況を過去の歴史と結びつけることによって、自己の存在に関する確定した意味を見出したい、ということが執筆動機になっています。これは歴史叙述が、最終的に「意味」の付与を目的とし、過去の多様な出来事を、「始まり」(起源)と「終わり」(現在?)を持った「物語」的構造の言説に変換する働きを持つことを示しています。逆にいえば、作者の現在の状況に意味的連関を持たない過去の出来事は、無意識のうちにその叙述から排除されることとなります。

ここで問題になるのは、歴史叙述はどんな立場・視点によって書かれるのか、ということです。過去、歴史叙述は当該社会において支配的な立場にあった者の視点から書かれることが一般的でした。支配的立場にある者(またはその代弁者)が、現在の状況に肯定的意味を与え、その過去との連続性(アイデンティティ)を確立するために歴史を編纂する、というケースが圧倒的に多かったわけです。このことは、戦前との断絶が強調され、民主主義的に生まれ変わったとされる戦後の日本社会においても、基本的に変わりません。例えば中等教育で用いられる『日本史』の教科書や、複数の出版社から繰り返し刊行されてきた、『日本の歴史』シリーズにおいては、国家の主権者ある「国民」という共同的主体が仮構・創出された上で、これを主人公とする物語的歴史が叙述されてきたといえるでしょう。(筆者が所属している「国文学」という知の制度も、同様の物語的歴史観によって支えられています)

しかし、21世紀(この言葉自体、もとはある特定の立場に拠って見出された「起源」に基づく言葉ですが)を迎えた現在、我々は国内においてさえ、国籍や言語・来歴の異なる人々と共存し、日常的な交渉を持つ多元的な社会に生きています。このような社会で、その歴史を最大公約数的な立場・視点から叙述することは、必然的に多くの盲点を抱え込み、さまざまなレベルにおける少数者に対する認識論的暴力を発動してしまうことになるでしょう。とはいえ、歴史叙述がある立場を主体化(他の

立場を客体化) し、「始まり」と「終わり」を持つ物語的構造を備えることではじめて成り立つ、という条件自体は変わりません。「倫理」という言葉を、「他者を手段としてのみならず、目的としても扱うような態度」(カント) と定義づけられるとすれば、歴史叙述のみならず、物語的構造を持つ言説はすべて、根本のところでは非倫理性を抱え込んでいることとなります。人間は一方では意味による支えなくしては生きてはいけない存在であり、従って物語を必要とします。しかし、物語的な言説が優位に立つところでは、倫理性は窒息し、立場・視点を共有できない他者との関係は分断されてしまうこととなります。

ここで、我々は「他者に対する認識論的暴力を発動することなく、他者の差異(他者性)を最大限尊重しうるような歴史叙述はいかに可能か」という問いに直面することとなります。21世紀の歴史叙述は、以上のようなテーマをめぐって、試行錯誤を続けていくことになるでしょう。このテーマを追求するのに、筆者は過去の歴史叙述の分析とともに、モダニズム以降のさまざまな芸術作品や芸術理論、応用倫理学の成果などを参照していきたいと思います。

なお、この歴史叙述の物語性をめぐる問題は、社会的に流通している(歴史とは直接関係のない)他の諸言説のはらむ物語性をめぐる問題にも敷衍することができると思います。たとえば、マス・メディアによるニュース報道や議論の中で、幅広く流通し、社会的に有力な世論を形成するような言説は、多くの場合、(ある立場・視点から採られた)強力な物語性を含んでいます。これらの物語的構造を分析し、それが他者(少数者)に対して抑圧的に機能してしまうような場合、それに対するオルタナティブな表現のあり方を模索することは、当該社会における倫理性(と自由)を維持するための、必要不可欠な作業の一つといえるでしょう。このような、広い意味で「メディア・リテラシー」に属するような実践も、射程に入れていきたいと考えています。

最後に――。歴史叙述及び他の諸言説における物語性と倫理の関係を徹底して考えるなら、我々はこれらの諸言説を存在せしめているメディア・システム、更にそれが一部を構成しているところの、世界資本主義システムの非倫理性を問題にせざるをえなくなるでしょう。この点に関して、筆者には十分な用意はありません。が、マイノリティの問題に限らず、21世紀における倫理性の行方について考えるなら、いずれ現行の資本主義システムに対するオルタナティブ・システムの考案を避けられなくなるだろう――という見通しをもって、この文を終わりたいと思います。(終わり)

